

SKI RACER  
ニッポン・アルペン事情

松尾潤=文・写真 text&photo:Jun MATSUO

大越龍之介

石井智也

# ライバルそして 次世代のエース候補

石井智也がコツコツ積み上げるタイプなら、大越龍之介は一気に駆け上がろうとするタイプ。1歳違いのライバルは正反対の性格と言ってもいい違いをもちながらも、将来のエース候補という同じ期待を背負っている。そしてお互いの違いを尊重しながら競い合い、微妙な距離を保ちつつ同じ大学、同じナショナルチームで火花を散らしている。

いしいとちや●1988年5月23日生まれ、北海道出身。歌志内市生れ。歌志内中学→北照高→東海大。2008年2月の世界ジュニア選手権SL(スペイン)で銀メダルを獲得した大器。インターハイでも二冠を達成している。日本のアルペン会に多くの名選手を輩出している。かもし岳レーシング(高藤博代表)が所属する北照高(工藤裕隆監督)OBという点も期待の理由。09・10シーズンは、ナショナルチームC指定。身長173cm、78kg



おおこしりゅうのすけ●1988年11月29日生まれ、北海道出身。札幌生れ。牧田郡倶知安町育ち。倶知安中学→東海大四高→東海大。インターハイでは2年連続で二冠を達成。ジュニア育成に定評のあるこせこ花園スキーレーシングチーム(寺田政憲代表)でスキーを始め、スキーの楽しさを忘れることなく成長してきた選手。今年からマテリアルをフィッシャーに変えて、ソチ(ロシア)オリンピックまで勝負を賭ける。09・10シーズンは、ナショナルチームC指定。身長173cm、体重75kg

## マテリアルチェンジの理由

「オリンピックまでの道筋は見えていた。2014年のソチ(ロシア)のことまで考えている」

大雑把なようで意外にもしっかりと物事を考えているのが大越龍之介。現状では、バンクーバー(カナダ)オリンピックは出場することが目標になるが、ソチではメダルを取るためのオリンピックと捉えている。今シーズンはシーズン序盤から結果を出すことが必須条件だと認識しており、「最初の入り方で気持ちも変わると思う」と6月に話した。

10月25日のワールドカップGSの開幕戦では途中棄権。その後のヨーロッパカップ、FISレースでも4レース連続で途中棄権と思つたようなスタートができなかった。今、何を思っているのか判らないが、ここからが正念場。今シーズン、大越はマテリアルを変え



「これだっ」って  
思えるものを  
探している。(大越)

た。アトミックからフィッシャーへ。5月のスキートテスト(北海道)では5社のスキーとブーツをテストした。「コロコロ変えられるものじゃない」という意識はもっている。ソチまでを一つの区切りと考えた上で、フィッシャーを選択した。そこにはいろいろな思いがある。アトミックの方がサポート体制を含めた総合面で有利かもしれないが、選手が多いだけに欲しいスキーが手に入らないというジレンマがあった。その結果選んだのがフィッシャー。しかし、大越はシーズンの出だしから壁にぶつかった。5月のニュージーランド遠征に行くことを希望していたが、ナショナルチームは大越を帯同させなかった。理由を聞いても大越は「いろいろな事情があって……」と言葉を濁す。8月のニュージーランド遠征は(ソチ対策)と銘打っており、ジュニアチームの選手と帯同することになった。石井智也も同じ。本人達がバンクーバーのチ

ヤンスを諦めていないにも関わらず、バンクーバーはトップの3人で勝負するチームが宣言しているような体制だ。

**一気に駆け上がる勝負脳**

ニセコ花園スキーレーシングチームでスキーを始めた大越はすぐにスキーが大好きになった。代表の寺田政憲は楽しませるスキーで個性を伸ばす指導者なので、スキーが嫌になる要素はなかった。滑ることが純粹に好きだった大越が競技会に興味を持ち始めたのは、ニセコでモーターの大会を見たとき。アルペン競技の面白さは中学生になった頃から。勝てるようになる、勝敗を決める緊張感と達成感がスキーの魅力に加わった。

「スキーが上手くなることも好きだけれど、大会で勝つことが好きになった」  
 その後は中学、高校でタイトルを取りシニアのナショナルチームにも選ばれる選手に成長した。そして、子供の頃は目標になかったオリンピックに対する興味が急速に湧いてきた。

「オリンピックが手に届くものになってきたと思えてから、『オリンピックに出たい』、『オリンピックで優勝したい』と思うようになった。北京が刺激になった。4年に1回しかない大会で勝つ選手はすごい。オリンピックの価値を理解できるようになってきた」

「勝負脳の鍛え方(林成之著)」という本にも出会い、持ち歩くようになった。その本には、「普段いる場所は坂道の途中

で、『これでいい』と思うと転げ落ちる。目標を達成するには全力で駆け上がらなといけない」という趣旨の話が書いてあるという。何回か読み返しているそうだが、大越自身の考え方を肯定する内容が多く、背中を押してくれる。

「バンクーバーで自分をどこまで試すことができるか。そして、ソチまでにワールドカップのランキングでトップ7に入つてメダルを狙う。金メダルを狙うならトップ3を常に争っていないと、もし金メダルを取っても『運がよかった』と言われてしまう」

バンクーバーに出場して、そのまま一気に駆け上がりたいのだ。そして、夢は金種目で戦えるオールラウンダーと広がる。「いつか、誰かがやらなといけないうのなら、俺がやってみよう」という気持ちはあるし、DHにも挑戦したい。高速系チームが消滅して久しい今の日本チームでは果たせないが、SCは大越が世界に出て行くには最適な種目だと思う。経験を積みながら、バランスよく彼の能力を活かせる種目だからだ。

「まずは技術系から。そこで結果を出してから高速系にも挑戦したい。ソチはSLが中心でGSでも戦える選手になってほしい。でもキッツビューエル(オーストリア)のダウヒルコースを見てしまった以上、挑戦しないわけにはいかない」  
 大越がこだわっている技術はスキーの上で速く動くこと。パワーとスピードの両立が必要だが、先シーズンはパワーに

偏り過ぎた。バランスを取ることに意識がいくようなレベルではスキーの上で速く動くことができない。バランスを無意識に取れて、例え崩してもすぐに戻すことができることが理想。それができるオーストリアの未来の大エース・ヒルシャイが大越に刺激を与えている。日本チームでは皆川賢太郎(竹村総合設備)が一番の刺激で、なんでも相談できる兄弟。

「日本チームで一番スキーのことを知っている人。賢太郎さんに聞くのが一番だと思ってる。スキー以外のことでも学ぶことは多い」  
 合理的でないようなことであっても一度は自分で試してみるのが大越のやり方。誰かに言われたことをそのまま受け入れるよりも、失敗をしてもいいから試

したい。攻め方も同じで、最初から120%で行く。最初は多くの失敗があっても、キャパシティが大きくなれば最初の120%が100%になり90%になっていくという考え方だ。彼には教えるコーチよりも環境を整えるコーチが必要。ニセコ花園スキーレーシングの寺田代表は環境を用意してくれるコーチだから、困ったときや悩んだときはニセコに帰る。自分の滑りに集中して出口を見つめる。アドバイスは寺田代表がたまに言ってくる一言で十分効く。大越がソチまで思い描く道筋を歩くには、何かを変えるか決断をする必要があるかもしれない。そして何より重要なことは、置かれた環境でトップに立つことだ。そうすればチーム・大越として発言力が増す。



「ケガをしてよかった」と思える日のために。(石井)

**質素で家族思いのEース**

「欲しいモノはとくにない。家族が幸

せに暮らしていければいい」  
 これから世界に出て行って名を上げようというレーサーらしからぬ欲のなさ。歌

志内に住む家族とかもい岳レーシングの  
コーチや仲間と愛されて育ってきた石井  
智也は、コーチの家に眠っていたバブル  
時代に流行ったインヴェクタのバックに  
必要なものを詰め込んで大学に通う。流  
行遅れのデザインを気にする素振りも見  
せずに、「これ、いいでしょ」と見せてく  
る。学食と一緒に昼食を食べたとき、そ  
のバッグの中から大きなタッパに入っ  
た白飯が出てきた。肉うどんをおかず  
にして、白飯をガツガツと食べる。思わ  
ず、自分の定食からチキンカツを一切れ  
つまんで石井の白飯の上に乗せた。世界  
ジュニア選手権のSで銅メダルを獲得  
した未来のエースは質素な大学生活を送  
っていた。夕食はスキー部の寮で相原博  
之監督の奥さんが用意してくれるが、昼  
食は量でカロリーを稼いでいるようだ。

08年2月の世界ジュニア選手権のS  
で石井が銅メダルを獲得したニュースを  
聞いたとき、チャンスが来ていると思っ  
た。しかし、同じ年の10月19日に石井は  
合宿先のヨーロッパで右膝の靭帯を断裂  
してしまふ。最低でも1年を棒に振ると  
思った。しかし、石井はポジティブだっ  
た。一時期は落ち込んだかもしれないが、  
そういう姿は見せなかった。  
翌年のサロモンカップでは旗門員を務  
めていた。「人がスキーをやっているの  
を見るのも好き」という石井は家でジッ  
としていられないのだ。リハビリでかも  
い岳温泉ホテルのトレーニングルームを  
使っており、実家にいるときは毎日のよ

### うにかもい岳に顔を出していた。 トップアスリートの刺激

朝帯断裂のケガから約6ヵ月後には雪  
上に立つことができた。5月のナシヨナ  
ルチームの遠征では基本トレーニングが  
中心ながらも、ポールにも入る回復をみ  
せた。

「インスブルックの病院でMRIを撮っ  
てもらったときに『明日なら手術ができ  
る』と医者に言われたんです。『手術前の  
リハビリの必要がないから1ヶ月くらい  
早く復帰できる』と言われて受けること  
を決めた」

実績のある医師に見てもらえ、偶然手  
術のスケジュールが空いているという幸  
運にも恵まれた。それからは積極的にリ  
ハビリに取り組み、北海道と東京を何度  
も往復してJISS・国立スポーツ科学  
センターに通い詰めた。長いときは1ヶ  
月近くJISSに泊り込んだ。JISS  
では一流の選手がリハビリを行ってお  
り、多くの刺激を得ることができた。  
「ライバルが滑っていることに焦ること  
はなく、自分の身体作りに専念できた。  
JISSには合計で約3ヶ月間いました  
が、午前・午後とあったりハビリを午前  
中に詰め込んで、午後は筋力トレーニン  
グに当てた。術後72kgになっていた体重  
が最後は78kgにまで増えていた」  
単調なトレーニングだが、石井は飽き  
ることはなかった。最大の理由は、トップ  
アスリートから受けた刺激。サッカ

ー、ラグビー、レスリングなど普段は接  
点がない種目の選手と出会えるのがJIS  
Sの隠れた魅力。カヌーで北京オリン  
ピックに出場した選手と仲良くなり、多  
くの話を聞くことができた。彼は週に日  
回もウエイトトレーニングをするほどパ  
ワーアップに力を入れている選手で、  
40kgの重りをつけて懸垂できるほどパワ  
フル。オリンピックの代表になった選手  
がそれほどまでにパワーを求める姿が刺  
激になった。それほどまでにパワーがあ  
っても、オリンピックではまだパワー不  
足を感じるのだ。この話を聞いて石井が  
燃えないわけがない。もしケガをしてい  
なければ、この刺激はなかった。「パワ  
ーの必要性を他の種目の選手に学ぶこと  
ができた。『ケガをしてよかった』と思え  
る日が来ると思う』と言えるようになって  
いた。

### チャンスはつかむもの

雪上に戻った石井の今の課題は、ター  
ンのとときに腰が開くことの修正。早い段  
階で腰を捻り過ぎて腰が外れるとターン  
の前半でスキーが曲がってこない。この  
癖の修正に5月の遠征を費やした。  
「外脚に乗ろうとし過ぎて骨盤を外に向  
け、スキーと違う方向に向いていたから  
膝を捻って靭帯を切ったと思う。Sで  
靭帯を切っていただけにSのセットに  
入ったときは少し怖かった」

この遠征はスキーテストが主な名目で  
あったが、この時期に滑っているのと8

月のニュージールランド遠征から滑るので  
はシーズン序盤のスタートが早いすぎる  
だけに、5月にどうしても雪上に立ちた  
かった。膝に水が溜まることもなく回復  
は順調で、8月からの遠征にも帯同で  
き、10月にはGSで念願のワールドカッ  
プデビューも果たした。2本目に残るこ  
とができなかったが、これは織り込み済  
み。重要なのはバンクーバーの代表が決  
まる1月中旬までのレース結果。

「バンクーバーのチャンスは充分にある  
と思う。チャンスはつかむものだと思う。  
身体をしつかりと作ってきたから滑  
りも変わる。ヨーロッパカップで30番に  
入るのは当然のことで、トップ10に入っ  
てワールドカップに出るようにならない  
とチャンスはつかめない。トップの3人  
に勝てばチャンスはある。まだ、誰がバ  
ンクーバーの代表になるか決まっていな  
い。春、コーチに『トップの3人を出す』  
と言われたけれど、それは違うと思う。  
一桁のFISポイントを取ればチャン  
スはつかめる。何がなんでもオリンピ  
ックに出たい」

バンクーバーに向けての戦いは非常に  
難しいものである。JOC(日本オリン  
ピック委員会)は「メダルを狙える選手」  
という基準を設けているために、経験を  
積ませるためにチャンスを与えることは  
ない。しかし、諦めずに戦い続ける。こ  
の戦いが未来につながるという想いは必  
要ない。「何がなんでも出たい」という石  
井の戦いを見届けたい。